

Title	鹿児島ノベルナルド
Sub Title	Bernard of Kagoshima, by E. Nieremberg
Author	Nieremberg, E.(Nierernberg, E.) 岩谷, 十二郎(Iwatani, Jujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.23, No.4 (1949. 6) ,p.23(419)- 32(428)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯ザビエル研究
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19490600-0023">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19490600-0023</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 鹿兒島のベルナルド

ニエレンベルグ

岩谷十二郎 譯

まへがき

ジヨワンニ・エウセビオ・ニエレンベルグ Gio Eusebio Niremborg の著「耶蘇會著名人芳徳誌」 Ideas Virtud en Algunos Claros Varones de la Compania de Jesus, vols. 9. Madrid 1643 の第四卷六〇—六五頁に「鹿兒島のベルナルド」の一節がある。その標題詳しくは「聖フランシスコ・ハビエールの伴侶にして、耶蘇會に入りたる日本の最初の者なる鹿兒島のエルマーン・ベルナルドの傳」となる。昭和七年夏天理圖書館で史料を採集した折、當時司書をしてをられた高橋道男氏の好意によつてロートグラフ版にすることが出来た。この度岩谷十二郎君の努力によつて翻譯の出来たことは、目出度い。ベルナルドに就いてはクロ師がその著「フランシス

コ・ザビエル傳」に可なり詳しく述べてゐるが、この一篇も亦或る種のプラスをするものと信ずる。(吉田小五郎)

キリスト(Christo)の聖なる殉教者エルマーン・ルイス・メンデス(Hernando Luis Mendez)の傳記と共にサンフランシスコ・ハビエール(San Francisco Xavier)の別の伴侶、鹿兒島のエルマーン・ベルナルド(Hernando Bernarde Cangoxima)の傳記を語らしめよ。この者は日本人(Japones)にしてキリストの信仰を受けいれるために、他の人々に道を聞き、洗禮の海路により榮光の港を航海して廻つた最初の者であり、又、かの王國

(薩摩を)にて耶蘇會 (Campania) の衣を着けた矢張り最初の者であり、そして死に到る迄、耶蘇會に留まつてゐた者である。

鹿兒島市 (Ciudad de Cangoxima) のこの祝福されたエルマーンは、薩摩 (Suxuma) の王國にて貴族 (武士を) の兩親の子として生を享けた。そして耶蘇會の人々に對して常に抱いた良き尊敬に於て彼の氣高き血統を示した。又父母が教へた偶像を崇拜して、日本 (Japan) の多神教の中に成長したのであるが、常に良い習俗を保つてゐた。何となれば、多神教徒たる白人隊の長コルネリオ (Cornelio) の如く、貧しき者に憫み深く、侮辱を耐へ忍び、溫和な良い性向を持つてゐたからである。又自己の救済を熱望して惜しみなく施與を行つたりした。かやうな徳行を以つてコルネリオの如く、彼は神によつてその幸福の扉を開かれる事に相當し、又誤りの闇から出て天國の道に入るため神を知るしるしをつけられる事、而して彼自身の故郷へゴア (Goa) から聖フランシスコ・ハビエールを迎へる事に値したのである。この聖人は一五四九年六月、鹿兒島に上陸した。そして曉の太陽が光り輝き、地を照らすが如く、東方のこの新しき太陽は日本に到着するや天國の光を放ち始め、そして死の蔭に死せるが如くに眠りたるかの人々

(日本) 全體に光明を與へ始めた。

彼の最初の説教を耳にした者の中に我がベルナルドがゐた。この者は良い理解力を持ち、推理に秀でてゐた。そして我が靈魂の事柄に於て誤らざらん事を願ひ、又一方に於て聖フランシスコ・ハビエール及びその伴侶パードレ・コスメ・デ・トルレス (P. Cosme de Torres) 並にエルマーン・ホアン・フェルナンデス (Hernando Juan Fernandez) がなせる模範的な生活を眺め、他方良い習俗のため、神と隣人の愛のために彼等が示したる神聖な教を眺め、以つて聖人を甚だしく敬慕し、晝夜を分たず彼と共に居る事を喜び、その口を出づる言葉を價高き眞珠の如くに受けとり、自己の心にそれを保たしめた。神の言葉は彼の心に蒔かれたる天國の種子であるが故にそこに根を下し、そして神の恩寵の灌溉を以つて榮光の實を産み出した。何となれば、天國の光に照らされて自己の過ちに氣付いたからである。更に今迄自分が、又父母が歩んでゐた道は破滅の道である事を知り、確信を以つて日本の格式の束縛を破る決心をした。其處(日本)に於て祖先の信仰に少しでも背く事、並に貴族が貴族ならざる者の歩みに倣ふ事、又キリストの信仰を受けいれて聖なるパードレが崇拜し、且つ説くキリストを神として崇める事、而して靈魂を洗禮の水で洗ふ事等

は不名譽であると思はれてゐた。彼は目論んだ通りにそれを實行し、聖フランシスコ・ハビエールの足許に身を投げ、天國の道を教へる様に自分をキリスト教徒 (Cristiano) にして、キリストの軍隊に配屬してくれる様に願つた。何となれば、その旗のもとに一生涯戦はんと決心してゐたからである。假令、そのために自己の血を流す事が必要であらうとも。

日本の諸王國に於て穫り入れを望んでゐた大收穫の初穂を我が手に見た聖フランシスコ・ハビエールの喜びは大變なものであつた。非常な犒ひと愛情を以つて彼を迎へ、そして直ちに我が聖なる信仰の玄義に於て教育し、その信仰を彼は、神の聖寵が彼の理解を夥しく助けたことにより、容易に受け入れた。そして近くの葡萄牙人 (Portugueses) を呼び集めた上、出來得る限りの莊嚴さを以つて、又彼自身の同じ喜びと、多神教徒共の讚歎の中に聖なる洗禮が彼に授けられた。多神教徒共は今迄彼等の國に於てかゝる事を見た事がなかつた。

ベルナルドと云ふ名を彼に與へ、そして姓として、其處で生れ、其處で聖なる洗禮を受け、其處で天國のために甦つた市(鹿兒)の名を採つた。聖フランシスコ・ハビエールは薩摩の王(島津貴久)を訪ね、彼の計畫を報告すると共にベルナルドが洗禮を受けた事を話した。

すると王はこれを喜び、パードレ (聖フランシスコ・ハビエールを指す) にその王國の臣下にしてキリストの信仰を受けんと欲する者總てに洗禮を授ける許可を與へた。

この許可があつたので、ゴアへ聖人を探しに行き、且つ連れ戻つたパードロ (Padro) (ロー)の妻と一人の娘が洗禮を受け、又その親類大勢も、そして二人の坊主も洗禮を受けた。この事は我が聖なる信仰に關して大きな信賴となり、そして非常に多數の者が洗禮を受けたので僅かの日數の間にかの王國のキリスト教徒は八百人に達し、この人々に對して我がベルナルドが指導役となつたのである。そしてかの王國に於てなされた如き大收穫の一部分は疑もなく彼に負ふものなのである。何となれば、彼はかの人々がキリストの信仰を受けられる際に持つた障害を破つた最初の者であつたからである。

ベルナルドがキリスト教 (Religion Christiana) に對して抱いた敬虔の念を説明する事は容易な事ではない。毎日彼は神にその知識(キリスト)を授けられ、尙、その軍隊に列せしめ給はれたといふ恵みを感謝し、そしてその事は、聖フランシスコ・ハビエールの仲介によつたものであるから、いたく彼に感謝し、非常に深い愛情と彼の人格に尊敬の念を抱いたので、少しでも彼から離れる事を欲しなかつた。それ故、常に彼の傍らにあり、彼

を見失ふ事はなかつた。そして彼が行ふ不思議を眺め、日、一日と益々高く彼を評價した。何となれば、鹿兒島にある間、馬太聖福音書 (San Mateo) に記されてゐるキリストの様に、手を觸れた丈で一人の癩病患者を彼の面前で奇蹟的に癒し、又富み且つ強な侍の娘が既に息が絶え、葬られようとしてゐた時に彼女を甦らしめ、かの多神教徒共の感歎と驚きを引き起したからである。彼等は自分等の坊主共が、かゝる事を行へるを未だ嘗つて見た事がなく、又出來得るといふ空想もしてゐなかつた。かやうな行ひにより、又彼の聖き生活の事實によつて、ベルナルドも他の總ての人々も彼を神の如く、又人間としてよりも天國から降つて來た生き物の如くに眺めた。而して善良なるベルナルドは、自分が聖フランシスコの着てゐる衣を着ける價値のありや否や？ に就いて、又常に聖人と一緒に生活するために彼の如く信心深くあり得るや否や？ を考へ始めたのである。

自己の幸福の望みと、聖人に對して抱く愛情は彼を勵まし、それを願ふやうに動かした。しかし、尊敬の念と自分の卑しさがそれを求める事を妨げた。その様な高い恩恵に自ら價せざるものと思つたし、殊に改宗したばかりであつたからである。彼の心の中には相反するかやうな風が闘つて居り、烈しい暴風を引き起してゐた。その

暴風は彼を悲しませたが、しかし聖人がそれを鎮めた。何となれば、彼の考と心の中の願ひを知つて、愛情の籠つた優しい言葉を以つて説いたからである。そして彼の胸に蟠つてゐたものを取り除き、不可能と判斷してゐたものを可能ならしめ、更に耶蘇會の制度と、その衣と共に身に着ける義務とを了解せしめたので、彼はそれを實行する喜びと決心を得た。すると、彼の決心と願ひを見たので、修道生活に於て彼を助手 (Coadjutor) のエルマーノとして採用する事になつた。而して日本で耶蘇會に入會した最初の者であつた。

この恩恵により、善良なるベルナルドは喜悅の海に浸つてしまひ、聖人にいたく感謝して今後一生を通じて彼の後へに附く決心をした。それ故、聖人の從僕として行かれる處は何處迄でも伴はせてくれるやう、非常に虔しく頼んだ。何となれば、彼の願ひは聖人に仕へて一生を終へる事であつたからである。

聖フランシスコは感謝して、從僕としてではなく伴侶及び友としてこの申し出を受けいれ、そして何時もかゝる者として遇した。ベルナルドは聖人が日本に於てなしたあらゆる旅行に徒歩で、冬は氷雪を冒し、夏は酷暑を冒して同伴した。

始めは我々の國語(葡葡)に就いて持つた知識により、

しばしば通詞として働いた。又聖フランシスコ・ハビエールは日本語で書いた教理の説教集を持つてゐたが、これはエルマノ・ベルナルドが彼に與へたものである。そして廣場でその説教をなし、大なる聴衆の收穫を得た。それ故に日本の傳道中、又迫害に於て、更にかの王國(日本)に滞在した二年間に受けた苦しみに於ても、彼の助手であつた。この苦しみは甚だ多く、聖人を守るために生命を失ふ危険に晒された事も稀ではなかつたが、努力と勤勉とによつて彼を庇護したのである。何となれば、かの王國に於ける案内役であつたからである。市や街に到着すると、直ちに聖人は祈禱に没頭し、その間ベルナルドは廣場や街上に出て多少の焼米を求め、それを彼に與へるために衣の袖に載せて持つて來た。この僅かな食物を以つて二人はその生命をつないだのである。

一五五一年がやつて來た。この年の十一月、聖フランシスコ・ハビエールは、神が彼に依託し給うた信者の群に秩序を與へるために、ゴアへ歸るべく乗船した。そして日本にはパードレ・コスメ・デ・トルレス及びエルマノ・ホアン・フェルナンデスを残し、彼等を助ける働き手(Obremos) (補助布教師)を送るまで、この國のキリスト教徒の世話を焼かしめた。そしてベルナルドを悲しませ

ないため彼並に耶蘇會に受けいれられてマテオ(Mateo)と呼ばれた他の日本人を伴つたのである。

この二人の伴侶と共に出帆し、日ならずして非常に烈しい暴風に遭遇した。その暴風は五日間も續いた。信じて宜いところを云へば、聖フランシスコ・ハビエールの祈禱によらなかつたら、一同死んでしまつてゐたであらう。何となれば、船に打ち寄せる波の激しさは、船客であつた數人の回教徒(Moros)及びその從僕共を小舟と共に浚ひ、船長と水夫等に非常な苦痛を與へ、彼等は彼等(回教とそ) (の從僕)が溺れたものと思つた。しかし聖人は彼等が間もなく戻つて來るであらう事を確言した。驚くべき奇蹟が起つた。即ち聖人が親船から姿を消さずして小舟に乗り移り、危険に晒されてゐる者共の傍にあつて、彼等を勵まし慰めたのである。そして海と陸の主にして總ての原素に命じ、且つこれを制御する神(デウス)を信賴するやうに勧めた。更に聖人自身が舵を握り小舟を導き、それを親船へ伴なつて來た。目の前迄來た時に姿が見えなくなり、而して總ての者が親船から離れずにいる彼を目撃した。いづれも非常な喜びを以つてこの奇蹟を見た。我がベルナルドもこれを目のあたりに見たので、聖人に對する尊敬と驚歎の念を益々高めたのである。これは恰も聖パードロ(S. Pedro)が同様の場合にキリストに向

ひ、「主よ、我を捨て給へ、主がかゝる大罪人の友であることに我は値打ちせざればなり。」(Aparatos, Señor, de mi, que no soy digno de que esteis en compañía de un tan gran pecador)と言つたのに似てゐる。この大いなる奇蹟は靈魂の實を結ばすにはなかつた。何となれば、小舟にゐた回教徒共は奇蹟を見て、我が聖なる信仰に改宗したからであり、そして聖人は一同の喜びの中に彼等に洗禮を授け、このやうな原因によつて神がかゝる奇蹟を行ひ給うたからである。

一同はゴアに到着し、信者からも耶蘇會の人々からも天使が空から降つてでも來たやうな歓迎を受けた。

エルマーノ・ベルナルドが彼の靈魂の帆を張つた處は此處であつた。そして修道生活の秩序と整ひ、規則の勵行、更に僧院の修道僧達の熱心さと清淨さ、慈愛及び彼等を迎へた愛情などを見て心に喜びを感じた。而して僧侶と信者の階級、合唱隊員の歌、諸宗教の差異、司教、高僧及び神を崇める儀式と尊敬等を注目し、自分をキリスト教徒にしてくれた事に對して限りなく感謝し、日々、その奉仕に益々精進した。一方、聖フランシスコ・ハビエールは、この者が歐羅巴に渡り、そしてキリスト教を更に知り、他方、我がパードレ聖イグナシオ(S. Ignacio N. P.)の一切を報告せよとローマ(Roma)

へ赴かせる事に適當なりと判断したので、エルマーノ・マテオと共にこの旅路につくため乗船する事を命じた。これに對し、謙遜且つ柔順なるベルナルドは勇んで服従し、一言も返へすことなくかゝる困難を引受けた。聖人は聖イグナシオ宛と葡萄牙宛の書翰を彼に託し、パードレ・シモン・ロドリゲス(Padre Simon Rodriguez)に彼等を依頼した。その書翰の内容は次の如くである。

「ベルナルド及びマテオは日本の生れにして、歐羅巴、殊にローマ市(Ciudad de Roma)に在るところのキリスト教の偉大さを見る意志を以つて、かの地(日本を指す)からやつて來たものであり、かの地に歸るべきものである。其處に於ては自らの眼を以つて見たる事を語るであらう。彼等の證言は他の國々が我が聖なる教を侮らず、それに就き良き觀念を持たしむるに少なき權威ではなからうからである。」

更に次の様に記してゐる。  
「ベルナルド及びマテオは日本に於て余に非常な便益を與へた。これらの者は僅かの faut 並に値打ちの者であるけれど、非常な信仰を持つてゐる。彼等は葡萄牙とローマに移るため、印度(India)迄余について來る事を欲した。」

聖なるパードレは此處まで述べ、そしてかやうな書翰とその他の贈物を聖イグナシオに宛てて與へた。

兩人はゴアから乗船した。乗ると間もなくエルマーノ・マテオは彼の良き伴<sup>コベニエロ</sup> 侶が見てとつた悲しみの中に死んでいつた。この者<sup>ベルナ</sup> は一人で旅を続け、船中にあつても、又到る處で信仰と彼の聖き<sup>マエストロ</sup> 師から學んだ良い香を放つた。

リスボア(Lisboa) に到着すると、非常な歓迎を受け、パードレ・シモン・ロドリゲスを始め耶蘇會のあらゆるパードレに愛された。パードレ達は、丁度搜索者が約束の地<sup>(カナ)</sup> の見本のためにイスラエル(Israel)の民に持ち來りし一房の葡萄の如く、自分の國で日本の初穂を見たので、只々、神に感謝するのみであつた。

彼は葡萄牙のドン・ホアン三世(D. Juan el Tercero)のどころへ連れて行かれた。この王は彼を見ていたく喜び、又彼の口から日本の王國の事を知り、聖フランシスコ・ハビエール及び耶蘇會の他の教師達の手によつて、神が行ひ給うた奇蹟を知り、又かの國土<sup>(日本を指す)</sup> に福音を受ける適性があつた事を知つて大いに喜び給うた。この事は新しい働き<sup>(宣教師の事)</sup> をかの地に派遣するに與つて力があつたであらう。而して彼の旅路を続けるために必要なものを惜し氣なく與へたので、彼はローマへ向

つて出發した。其處では耶蘇會の總てのエルマーノ達の、慈愛と喜びの特別な表情を以つて迎へられ、そして我がパードレ・聖イグナシオの更に大なる歓迎の中に到着した。我がパードレは彼の靈魂の非常な満足<sup>(アルマ)</sup> を以つて、彼の愛する息子聖フランシスコ・ハビエールによつて耕された日本の葡萄園の最初の果實を目前で眺めたので、優しき涙を流し、至上神に感謝した。

此處で、信心深きエルマーノ・ベルナルドは彼の高き<sup>(アルケス)</sup> 徳性の輝きを示し、その聖い生活を以つて總ての者に良き感化を及ぼし、原始キリスト教の極めて完全な信徒の生れ代りの如くに見えた。彼の質素は類ひ稀れなものであり、彼の服從<sup>(オビエンス)</sup> 心は絶対極まるものであり、又彼の祈禱は信心深いものであつた。更に彼の謙讓さは非常なもので、あらゆる人の足許に跪いたのである。彼は慈愛深く、彼の言葉は聖らかで、總て天國の事ばかりを話し、カトリック教(Religion Catolica)を非常に高く讚美した。又彼は禁欲<sup>(モルティファイカシオン)</sup> 家にして、且つ寡黙家であり、非常な必要があらざる限り口を開かず、而してあらゆる面に互つて完璧の見本であつた。

彼はローマの諸聖域<sup>(サンクトワリア)</sup> (ラテラン、聖マリ)を極めて深き敬虔の念を以つて訪ね、かの聖なる遺物<sup>(キリストの)</sup> (十字架?)を拜んだ。そして世界の讚歎であり、且つキリスト教の生

み出した名高い寺々に參詣した。

神聖な行事には好んで席を連れ、眞の神を讃へる儀式に感謝し、ローマ教皇 (Sumo Pontifex) の尊嚴と樞機卿の尊威、司教の尊厳、伽藍 (Iglesias Catedrales) (ヴァチカン宮殿) の整然たる事、種々の儀式の神聖さ、その差別とその整ひ、並に質素なる事、而して内容の正しきを有する外形の整然さを、非常な注意を拂つて眺めた。そしてこれら總てを、自國の坊主共の團體、僧院、又彼等の生活、釋迦 (Xaca) の阿彌陀 (Amida) の作り話、その偶像並に偽りの宗教の創始者と比較し、自分の盲目さと、神がその盲目から彼を引き出し、そして聖なる教會の光と救の道に入れしめ給うた事を考へると、涙の川が彼の苦痛の頬を流れた。

總てを知つたのち、聖イグナシオは歐羅巴の科學の知識を持つて行かせるため、彼に多少の哲學を學ばせようと計つた。

しかし餘りにも長途の旅と、困難な航海のために損はれた彼の健康が良くないので、繼續する事が出来なかつた。それ故、彼の見たものを彼の國人に知らせに、又、キリストの信仰を説教しに、日本へ歸るための體力を養はせようと努めた。彼の説教から大きな果實を期待したのである。

哲學の學習で、師と共に費す筈の時間を、聖體祈念で神と共に費した。この聖體に就ても非常に敬虔の念が厚く、特にキリストの苦難と我が父の祈りを思ふ事に於て、彼は至上神から聖きさとしを受けた。更にその祈りの言葉を非常な注意と敬虔の念を以つて眺め、一語一語に嬉しき歸依の渴仰の基を見た。そしてそれらの事を非常に見事に語つたので、聖イグナシオ並にその他のパードレ達は、彼をそれらに關聯せしめて、神が彼にさとらせ給うたこれらの玄義に就て聽くために、靈的な話をし掛けた。而してこのやうな事もあつた。或る日、天使に關して彼の感ずるところを彼に尋ねた事があつた。

すると、居合はせた者一同を感心させた程の知識と正確さと、そして才の鋭さを以つて答へた。その時居たパードレ・ヘロニーモ・ナダール (Padre Gerónimo Nadal) は、最も學識ある神學者と雖も、この事柄に就ては、彼よりも正確に話す事が出来なかつたと證言した。

日本へ歸る日がやつて來た。我がパードレ・聖イグナシオは、優しい涙と愛情ある抱擁と共に、彼をローマから送り出し、彼にその任務を有効に行はしむるため、極めて聖い助言を與へた。

リスボアまで彼に伴侶をつけ、聖遺物、聖水、聖畫、並にメダイ等の貴重な寶を、彼の國へ持つて行かせるた

めに與へた。しかし、未來を現在の如くに見、最も適切なる事を知り給ふ神は、彼の意志だけで満足し、その希望を達せしめ給ふことなかつた。何となれば、コインブラ (Coimbra) に到着した際、重い病氣を彼に與へ給うたからであつて、この病氣によつて彼の生涯を終へ、日本への旅を天國への旅に變へたのである。其處へ、彼はかくも長い旅の後、彼の價值せるものを永遠に樂しむために昇天して行つた。

この神の僕の生涯は、パードレ・ベルナルド・ヘネーロ (Padre Bernardo Genero) が、彼の、「東洋のハビエール」(Xavier Oriental) の中に、伊太利語 (Lengua Italiana) で、第二篇、第十卷、第七章に書き記してゐる。

オルランディーノ (Horlandino) も、「聖フランシスコ・ハビエール傳」(Vida de Sanfrancisco Xavier) 第十四卷、第十四章で述べてゐる。

又、パードレ・ペードロ・デ・リバデネイラ (Padre Petro de Ribadeneira) も、同じ聖人の傳記の中に、簡潔に記してゐる。更にそれ(聖人の傳記を指す)を語る總ての者が、筆を執つてゐる。

## 譯註

一、新約聖書、使徒行傳、第十章に出てくるローマの軍人。百人隊とは、百人の歩兵を一隊としたもので、六十隊を以つて一軍團となした。尙、第二節を拔萃してみるに、「信心深く、家族一同と共に神を畏敬し、人民に多くの施與を行ひ、常に神に祈りつゝありしが」とある。

二、el qual desembarcó en Gangoxima el año de 1549 por mes de Junio. Junio は六月。八月 Agosto の誤である。

三、文中にもある如く、新約聖書、馬太聖福音書、第八章に記されてゐるイエズスの行つた奇蹟。第三節に次の如くある。

「イエズス、手を伸べて彼に觸れ、我意なり潔くなれ、と曰ひければ、其癩病直に潔くなれり。」

四、右に同じく、第九章にあるイエズスの行ひし奇蹟。第二五節を見るに、

「群衆の出されし後、イエズス入りて其手を取り給ひしかば、女起きたり。」

五、新約聖書、路加聖福音書、第五章に記されてゐる。ゲネザレトの湖で起つた奇蹟的魚漁を見て、シモン・ペトロがイエズスに向つて言つた言葉。第八節を拔萃してみるに、

「シモン、ペトロ之を見て、イエズスの足下に平伏し、

主よ、我は罪人なれば、我より遠ざかり給へ、と云へり。」

ギリシヤ語對譯の佛文聖書を見るに“Seigneur, retirez-vous de moi car je suis un pécheur”とある。従つて本文中のペトロの言葉は、聖書からの引用文でない事が判る。

六、一五五二年、四月九日、ゴア發パードレ・シモン・ロドリゲス宛。

七、右に同じ、文中 *faut (saut)* 意味不明 ∴ *son estos hombres, aunq de poco faut, y estimacion, de mucha Fe,*

H. J. Coleridge, *Life and letter of St. Francisco Xavier*, vol. II, 1921 につは、  
*They are poor, but full of faith* とある。

八、舊約聖書、民數紀略、第十三章、第二十七節、  
モイゼとアアロンに次の如く語りたりき。「我等は汝が遣はしし地に到れり。誠に、そこには、乳と蜜流れあふる。こゝにあるものは、かしこよりの果物なり。」

九、*Agnus* とある。 *Agnas* の誤植ならん。

一〇、パードレ・ベルナルド・ヘネーロの著書名か？  
X X X

固有名詞は原則として一回限り各々括弧の中に原文その儘を挿入したが、原文では所により、例へば *Japon, Iapó*

とある様に、綴が違つてゐる。従つて、最初に出て來た綴を挿入して置いた。

代名詞、又必要と思はれる名詞の下に附してある括弧、例へば「其處日本に於て」「薩摩薩摩の王島津貴久」は譯者の附したものである。

文中に記されてゐる註番號並に卷末の註は譯者の附したものである。